ハーディと東洋精神世界との接点

On Hardy's Point of Contact with the Spirit of the East

— in parallel with Heidegger's 'Über den Humanismus'—

阪　野　　勇
Banno Isamu

（1978年11月29日　受理）

まえがき

ハーディと仏教との類似点については，既にいろいろいわれているが，non-humanism ── 非人本主義 ── という観点から東洋精神世界との親近性を論じたものはないようである。

ヒューマニズムといえば，俗に弱いものに対するあたたかい心という程の意味で使われるのだが，こゝではその本来の意味，即ち人本主義という意味で用いることを初めに明確にしておかなければならない。

ハイデガーも Über den Humanismus の中で，……Anthropologismus, und als solcher Subjektivismus.[1][2] といっているように，この意味でのヒューマニズムは人間中心の主観的世界観である。

ヘレニズムは勿論のことだが，ヘブライズムをも含めて，西欧精神の根底にあるものは，この意味に於けるヒューマニズムである。勿論両者は西欧精神の枠内では一応対立し，互に消長を繰り返して来た大思潮であることは歴史的事実であるが，東洋精神と対照する場合には一つの範疇 ── ヒューマニズム ── には入るものと考える。民族宗教のユダヤ教がキリストの出現と共に一応世界宗教となっても，人格神宗教であることに変りはない。フォイエルバハのいうように，こゝにキリスト教の人本主義的性格がある。ハイデガーも次のようにいう。

> In dem gennanteh weiten Sinne ist auch das Christentum ein Humanismus,[3] insofern nach seiner Lehre alles auf das Seelenheil des Menschen ankommt und die Geschichte der Menschheit in Rahmen der Heilsgeschichte erscheint.
>
> その教義に従えば，凡てが人間の霊魂の救いに帰着する限り，上述の広い意味ではキリスト教もまた一種のヒューマニズである…。

ハイデガーもキリスト教を一種のヒューマニズムといってゐるわけである。スピノザは「神学・政治論」の中で，フォイエルバハは「キリスト教批判」の中でキリスト教の人格神を痛烈に批判してゐるのだが，一応対立思潮とされてゐるヘレニズムとヘブライズムは根本的には共に人間中心の主観的世界観である。subjectivismが文明と文化の上に残した功績と栄光を必ずしも否定するものではないが，人間の思い上がりは，中生代の爬虫類が強大になりすぎて結局絶滅したように，人間の悲劇的な終末を齎らさないとも限らぬ。核，自然の破壊と収奪等を考えれば思いなかばに過ぎるものがある。

従来ショーペンハウァーがハーディ論によく引合に出されてきた。前者のblinder Wille(盲目意志)と後者のImmanent Will(内在意志)に相似た思考があるからであるが，ハーディ論にハイデッガーの名がのぼったことはない。しかし両者の間には，それぞれ独立してその思考に極めて相似た並行関係がみとめられるので，こゝではハイデッガーの Über den Humanismusと関連させ乍ら，西欧ヒューマニズム と対蹠的な東洋の精神世界とハーディの接点をみてゆきたいと思う。

I

遠望，瞰瞰される人間

ハーディの小説の中では遠望され或は瞰瞰される人間がa speck, a shape, a spot, a figure 等々として情景の中に現れることが多い。それらを受ける動詞は殆ど例外なくreflexiveである。主語がlifeless thingであるからimpersonal reflexive ー非人称再帰語法ともいうべきものである。何でもないことだが，これは単なるstyle の問題ではなくてハーディの深層意識の中にある無言の哲学と不可分のかゝわりあいがあるものと考える。

The landlord perceived a black spot on

the distant white, which speedily enlarged itself and drew near.

—Honourable Laura I

宿の亭主は一面まっ白な野面(づら)の遠くに黒い一点をみとめた。 それはみるみるうちに大きくなり近づいた。

馳落者をのせた二輪馬車が自動人形のように近づいてくる所である。こゝで非人称再帰語法が用いられているが，こゝを which speedily grew large and drew near. としたらどうか。それはwriterの側からみた単なるdescription に過ぎなくなるだろう。このstyle は次章ハーディとアニミズムの中に引用した僅か十数行の中に二ケ所もみられるのだが，ハーディの作品の中には数え切れぬ程出て来るものだ。前田五郎氏は Vergleichende Grammatik der deutschen und der englischen Sprache の中で Das Buch hat sich gefunden. Das Buch hat sich finden lassen. の例をあげて「本がノコノコ出てきたようなかんじがするのです」といっておられるが，非人称再帰語法は主語にspontaneity を与える。ハーディの小説の中の人物，事物が自動人形のように動くとよくいわれるが，少くともその秘密の一つはこゝにある。元来reflexive はインドヨーロッパ語の特徴の一つであり何も珍らしいものではないが，非人称再帰語法は近代英語には殆どみられないものである。

The reddleman watched his form as it diminished to a speck on the road and became absorbed in the thickening films of night.

—Return of the Native II

赭石売はその姿（老艦長）が道のうえにだんだん小さくなって，ついには一点となり，濃くなった夜の帳の中に吸込まれるまでみおくった。

his formは今は退役して淋しい Egdon Heath に住む老艦長である。馳落者をのせた二輪馬車とは逆に望遠レンズでの描写から広角レンズの中にzoom outしてa speck となってしまう。ハーディの作品のなかの人物はa speck, a spot, a shape, a form或はa figure として情景の中にimergeして，（この動詞もハーディの作品に頻出する。come out, appearに比べて，emergeは主語にspontaneity を与えるようだ。）そして情景の中にfade out する。 人間は情景の中の一点なのである。雪州の山水長巻，大観の生々流転の中の人間を見るようである。

次に瞰瞰される人間について述べる。

Two on the Tower（塔上の二人）でハーディはこの小説の意図を次のように述べている。

This is the outcome of a wish to set the emotional history of two infinitesimal lives against the stupendous background of the steller universe.

これは星座のきらめく大宇宙を背景にして，その中に極微の二人の人間の愛の挿話をセットしてみようという願望から生まれたものである。

この意図はのちのハーディ単生の大作 The Dynasts に於て壮大な展開をみせる。The Dynastsはナポレオン戦役の欧州の大動乱を天上界から瞰瞰する133場に亘る大叙事詩劇である。その壮大さは英文学史上ミルトンの失楽園と並んで他に比類をみないであろう。その一例をこゝに引用する。これはこの壮大叙事詩劇の FORE SCENE のト書の前半であるが，ト書自身が又非常に文学性豊なものであることをつけ加えておきたい。

The nether sky opens, and Europe is disclosed[(4)] as a prone and emanciated figure, the Alps shaping like a backbone, and the branching mountain-chains like ribs, the peninsular plateau of Spain forming a head. Broad and lengthy lowlands stretch from the north of France across Russia like a grey-green garment hemmed by the Ural mountains and glistening Arctic Ocean.

下界が開ける。ヨーロッパがうつぶせてやつれた姿をあらわす。アルプス山脈は背骨，その支脈が肋骨，スペイン半島の高地が頭の形をしている。フランス北部からロシヤを横切って広く長ながと低地が走ってゐるが，それはウラル山脈と，きらめく北極海に縁どられた緑の衣裳のように見える。

つづいてその後半である。

The point of view then sinks downwards through space, and draws near the surface of the perturbed countries, where the peoples, distressed by events which they did not cause, are seen writhing, crawling, heav-

ing, and vibrating in ther cities and nationalities.

次に視点は空間を下降して動乱の国々の地表へ近づく。そこでは諸国の国民が自分が惹き起したものでもない事件に困惑し彼等の都市や国々で，のた打ち廻り，はいづり，呻き，震えているのが見える。

The Ancient Spirit of the Year ー年月の霊ーをはじめ，諸霊が天上界から瞰瞰する大パノラミックスウィープである。この大パノラマの中で，前線にとりついて，cheese-mites(チーズ虫) のように忙しげに動きまわる無数の人間らしきものが見える。一群の蛾のようにみえるもの一それは満帆でトラファルガに向うネルソンの大艦隊である。近づく大殺戮戦の予感におびえて地中の虫まで遁走する。人間も虫もー草木禽獣凡て区別はないのである。

こゝで又ハイデガーの一文を借用する。Das Wesen des Menschen beruht auf dem In-der-Welt-sein.[5] ー人間の本質は「世界内存在」に基づく。これはハイデガー哲学の大前提をなすものと考えられる。ところで古代希臘のプロタゴラスに，「人間は万物の尺度である」という有名な言葉がある。これは西欧精神の根底をなすもので，カントの主観哲学に結晶するのだが，ハイデガーの人間の本質は世界内存在であるという思考はプロタゴラスからカントに至るSubjektivismus ー ハイデガーはAnthropologismus als solcher Subjektivismusといってゐるーとは真向から対立するものである。

ハイデガーによってIn-der-Welt-seinと規定された人間はもはや世界を律するものではなくて，宿命的に世界内にあり，従って世界に律せられるものである。瞰瞰された人間の所で述べたように，人間は見るものではなくて見られているものなのだ。このobjectiveな人間観の下では人間はさきに述べたcheese-mites(チーズ虫)のようにinfinitesimal beingとなる。ハーディとハイデガーの間には奇しくも一致する思考がみられる。両者共一応人間の否定であるが，否定から肯定に向うとき，ヒューマニズムは初めて謙虚な姿をとることになるであろう。こゝで両者は東洋の精神世界に外接することになる。

II

Der Mensch ist der Nachbar des Seins
(人間は存在の隣人である)
—Über den Humanismus—

Owls that had been catching mice in the outhouses, rabbits that had been eating the winter greens, and stoats that had been sucking the blood of the rabbits, discerning that their human neighbours were on the move discreetly withdrew from publicity •••
—The Woodlanders Chap. IV—

夜中に餌をあさっていた梟や兎，白貂は，人間が起きだしてきたので，思慮深くひっ込んでしまう所である。人間にはかなわないのでひっ込むのだが，それにしても動物達にとって人間はhuman neighbourであり，人間からすれば動物達はfowl neighbour, mammal neighbourということになる。人間は動物達と同列に並んでしまう。さりげなくいわれているhuman neighbourにはハーディの思考の根本にかゝわり合いをもつ大きな意味があると考えるわけである。

ハイデガーはDer Mensch ist nicht der Herr des Seienden. ー人間は存在者の主人ではないーと言い，又Der Mensch ist der Nachbar des Seins.ー人間は存在の隣人であるーと言っている。Über den Humanismusはいわゆるハイデガー後期に属する思考であるが，後期のハイデガーについては東洋的思考への接近がよくいわれていることだ。

再びハーディに帰ってーふくろう，兎，白貂，人間は，そのどれもが他の主人ではない。お互に村の隣人なのである。

III

ハーディとアニミズム

A Saturday afternoon in November was approaching the time of twilight, and the vast tract of unenclosed wild known as Egdon Heath embrowned itself moment by moment, ……
……
……The spot was, indeed, a near relation of night, and when night showed itself an apparent tendency to gravitate together could be perceived in its shades and the scene. The somber stretch of rounds and hollows seemed to rise and meet the evening gloom in pure sympathy, the heath exhaling darkness as rapidly as the heavens precipitated it.
And so the obscurity in the air and the obscurity in the land closed together in a black fraternization towards which each advanced half-way.
—The Return of the Native I —

十一月のある土曜日の午後もそろそろ暮れようとしていた。エグドンヒースとして知られているこの辺り一帯の広々とした荒野原は一刻一刻と黒褐色に染っていった。

……

こゝは，まことに，夜の近い親せきであった。夜が姿をあらわすと，その暗闇とこの荒野原は心を一つにしてお互を牽きあっているのがよく分る。陰気に広がっている円い丘や窪地がむくむくとおきあがって夕闇を迎え，ヒースは空が暗闇を落してくるのと同じ速さで暗闇を吐きだしているように見えた。それで空の夕闇と地面の暗闇はお互に途中まで迎えに出て兄弟のように親しくよりあって黒い一体となる。

マクミラン版のThe Return of the Nativeの裏表紙にThis is the most pagan of all Hardy's works, as Evelyn Hardy called it. とあるようにこれは西欧精神からいえば極めて異端的な小説である。上掲の引用はエグドン・ヒースの描写にはじまるChap. I の冒頭の一部であるが，エグドン・ヒースは「運命が扉をたゝく」というベートーヴェン第五の第一主題のように，この悲劇の最後まで，断続して平凡だがそれ故にまた何となく不気味な顔をのぞかせるのだ。

As with some persons who have long lived apart, solitude seemed to look out of its countenance. It had a lonely face, suggesting tragical possibitities.

（エグドンは）長く人里を離れて暮してきた人のように，孤独がその顔からのぞいていた。それは悲劇の可能性をうかがわせる淋しい顔をしていた。

この小説の中でエグドンはヘロインのユーステシヤその他多くの登場人物の単なる舞台ではなく，それ自身生きた登場人物であり，登場の度毎に無気味な，又あるときは詩的なアニミズムの世界を繰り展ろげるのである。

(I)でハーディの小説の中では非人称再帰語法が際立って多用されていることについて，又それが登場人物，事物の自動人形化の効果をもたらすことについて述べたが，(III)冒頭の引例の中のそれは又animistic sceneの構成にいかに有効に働いているかを示している。前半のEgdon, 後半のnightは単独ではlifeless thingであるが，それぞれEgdon Heath embrowned itself, when night showed itself とreflexive を伴えば読者は忽らアニミズムの世界に引きづりこまれるのである。

After passing the plantation and reaching Mellstock Cross the white surface of the lane revealed itself between the dark hedgerows like a ribbon jagged at the edges, ……

—Under the Greenwood Tree I

And now a further phase of revelry disclosed itself.

Ibid.

In the silence the trot of horses and the spin of carriage wheels became audible: the vehicle soon shaped itself against the blue sky.

—The Woodlanders XXVI

勿論ハーディのアニミズムがimpersonal reflexiveの多用によってのみ成立するなどといっているのではない。例えば

He (Winterborne) smelt like Autwmn's very brother, and……

—The Woodlanders XXVIII'

ウィンタボンはまるで「秋」の兄弟のように体臭まで（実りの）秋のような匂がした

……

その他ハーディ愛読者，研究者ならば誰でも知っているウィンタボンとマーティの植林の場面等枚挙の遑がない程である。

IV
む す び

(I)腑瞰，遠望される人間，(II)Der Mensch ist der Nachbar des Seins (III)ハーディとアニミズムで述べたことは，ハーディの思考が「人間は万物の尺度である」とするプロタゴラスに象徴される西欧的ヒューマニズムとは全く異質のものであることを示すに足るものといえよう。

The Dynasts のト書に見られるハーディの思考とハイデガーのDas Wesen des Menschen ist das In-der-Welt-sein, それからハーディのアニミズムとハイデガーのDer Mensch ist nicht der Herr des Seienden. Der Mensch ist der Nachbar des Seins.とはそれぞれ思考の軌跡を一つにしている。ハーディはハイデガーと共にもはや西欧的ヒューマニズムについてゆくことができなかったのである。

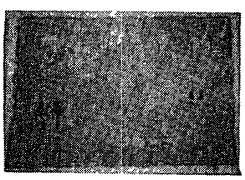
東洋にも主観的世界観があるではないかと問われるむきもあるかもしれない。特に地球も狭くなったことだし，生活も物の考え方も随分と西欧化した現在である。しかし，又東洋的思考がそう簡単に雲散霧消するものでもあるまい。

然らば東洋精神とは何か。古くは岡倉天心「東洋の理想」，から現在の「東西思惟形態の比較研究」，鈴木大拙氏「東洋の心」[7]に至るまで色々論じられているが，東西の精神世界の比較は何にもまして視覚によることが理解に至る一番てっとり早い方法ではないかと思う。

そこでモナリザをとりあげてみる。謎の微笑とよくいわれるが，別に微笑してゐるとも思えない。そこが又謎の微笑の所以かもしれないが，そんなことはどうでもいゝことだ。モナリザの出現以前に，人間の喜びに満ち溢れたボティチェリ「ヴィーナスの誕生」がルネサンスの黎明を告げる。その絵画的価値はさておき，それはまだ何か稚いものを感じさせる。やがてモナリザが現われる。モナリザに具はるあたりをはらう威厳の中に人はヘレニズムと人間の復活をまざまざと眼にすることになる。

ところで，モナリザのバックに森とS字状の小徑らしきものが見えるが，それはモナリザの迫力の前には全く影がうすいのである。ヴィーナスの誕生，モナリザに限らず西欧美術の主題が殆ど人間であることは西欧の美術館巡りをするまでもなく西欧美術全集を開いて見れば容易に分ることだ。

モナリザと対照して，雪州の長さ15メートルに及ぶ山水長巻をあげてみる。その中に所々人間が出てくるが，それは山水の中のa speck, a shape であり又人間の類型に過ぎない。人間は画中の石ころ，松の木と質的に何等異なる存在ではない。人間は存在への帰依の中に存在に没入する。これはまさにスピノザの汎神論の世界であり，人間はハイデガーのIn-der-Welt-seinなのである。雪州の山水長巻は500年の歳月を隔てた現代，横山大観の「生々流轉」となって東洋の人間観はその変らぬ姿をみせ[8]ている。



写真は小郡市在住の版画家木村晃郎氏の版画「道成寺縁起」である。右手の円丘に二人の人影が見える。それは人間の類型であり，なまじ個性など却って邪魔になるのだ。この人影は左手の円丘上の松の木のhuman neighbor である。これは Der Mensch ist nicht der Herr des Seienden（人間は存在者の主人ではない）の思考を版画化したものといえよう。〔因みにこの版画はハーディのThe Return of the Nativeのユグドンヒース（heath ははりえにしだの生い茂る原野）のほゞ中央にあるRain-barrow（雨塚）とヘロインのユースシヤヴァイがこの雨塚の頂きに一点の影としてこの小説の中にはじめて登場する場面，その原野の夕刻時の雰囲気に偶然とはいえあまりにも符合してゐるのが不思議である。〕これは古来の東洋精神世界の遺伝子が現代に覚醒したものだといえないだろうか。熊谷守一，坂本繁次郎　その他多くの洋画を学んだ画家たちが最後に帰りついた所はやはり東洋の精神世界であった。こういうわけで，いかに西欧化した現代であろうとも東洋の精神世界がそう簡単に雲散霧消するものでもあるまいといった所以である。

> Das Denken in Werten ist hier und sonst die größte[9] Blasphemie, die sich dem Sein gegenuber denken läßt.
>
> —Über den Humanismus
>
> （価値づけの思考はここでも，また他の所でも，存在に対して考えられる最大の冒瀆である）

とハイデガーはいう。価値づけの思考とは，人間の主観的な世界解釈と理解するのであるが，東洋の精神世界の中には始めから人間の思い上り，人間の奢はないのである。

ハーディと東洋の精神世界との接点は先づ第一に両者の非人本主義的世界観に在るとするわけである。

参　考　書　目

(1) Über den Humanismus-Klostermann（1975）以下 U. d. H. と略す。

(2) U. d. H. p.28 人間中心主義又それなりに主観主義

(3) Ibid.,p. 11

(4) The Dynasts（研究社版昭和十年）p. 14

(5) U. d. H. p. 36

(6) Ibid.,p. 29

(7) 東京書籍株式会社版（昭和52年）

(8) 昭和12年院展第12回出品　雪州「山水長巻」に劣らぬ長巻である。

(9) U. d. H. p. 35